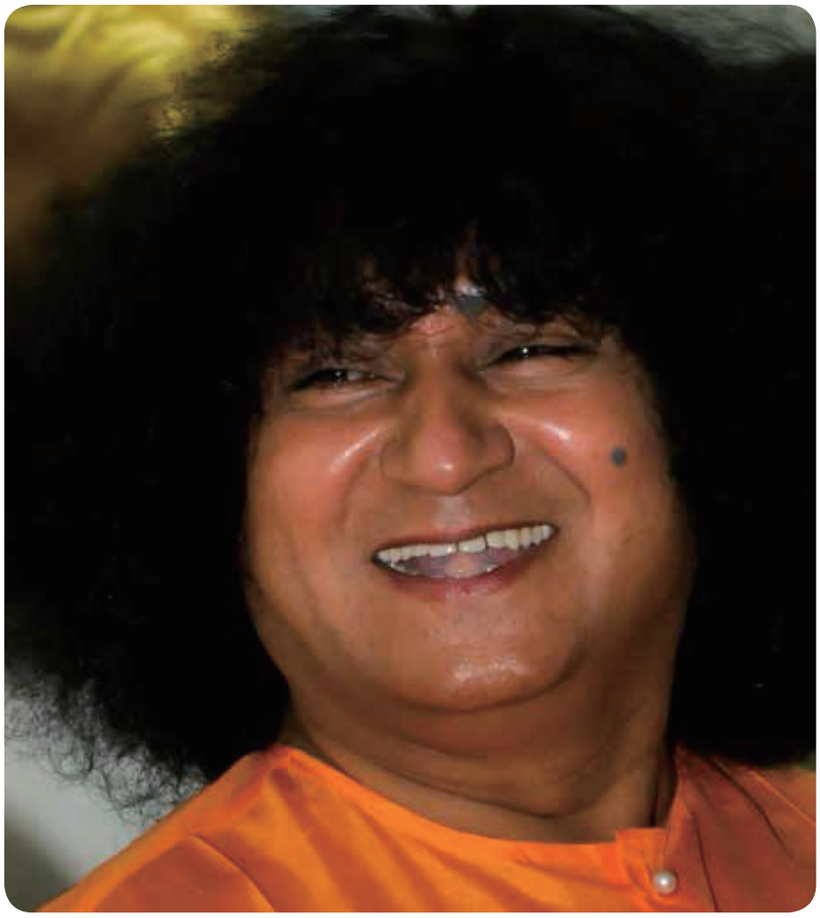
2018 年 3 号

Balasai News

インドの神の化身スリー・バーラサイ・ババの教えと慈善活動に関する情報

ふたつのリンガムを、ただ一人のものに与えたのは、
これが初めてであり、そして最後だ。
前回のリンガム、今回のもの。
その意味はともに同じで、「 シヴァ アンド シャクティ 」である。
「 Nature and Power 」だ。
シャクティとは「パワー」を意味する。
日本は、津波や噴火などがあり、自然に対する祝福を必要としている。
このリンガムは、日本の全ての「自然」と「人々」をとても強力に守る。
人々には、しっかりと働き、よりよい活動をするために必要な「パワー」を与える。
与えた個人に対しては、その家族、その仕事、その住む国に祝福を与える。
（ハイデラバードのアシュラムでババから直接賜った御言葉です。）

ババから 2003 年と 2014 年にトラストジャパン代表が頂いたリンガム



祈りは振動であり、
感情であり、思考である。
祈りは愛の声であり、
友情の声であり、真の関係の声である。
祈りはお前の密やかな本質の現れである。
常に祈り続けるように。

バーラサイ・ババ

15 年
ババ

勝つこともあれば
負けることもある

大切なことは
自分が
楽しむことだ

2003 年 1 月、私は初めてクルヌールにあるスリー・バーラサイ・ババのアシュラムに足を踏み入れました。この半年前にミュンヘン近郊のノイファーンで開催された情報イベントでババのことを知りました。当時、私は隣町のエヒングに住んでいました。情報イベントでは、長年の帰依者であるウルリケが「ババは人間の姿をした神の化身です。ババはすべてをご存知であり、奇跡を起こすこともできます」とババについて説明してくれました。

私は若いころからずっと神を探し求めていたので、この「バーラサイ・ババ」に興味を持ちました。1994 年にインドを旅行し、スピリチュアルな人々を訪問していたので、私にとってインドはスピリチュアルな国として多少なりとも馴染みがありました。また、ババについて夢中になって語る帰依者たちが、いたって普通の人であることにも気がつきました。ですから、彼らの話の中には何かしら真実が含まれているはずだと思いました。このようにして、私のババへと至る道が始まりました。

この記事では、私がババと共に歩んだ道の中でも幾つか重要な段階について再現していきたいと思います。このようなアイデアは 2018 年 2 月のアシュラム訪問の際に思いつきました。前もって白状しておきますが、私がババと共に歩んだ道は私が想像していたものとは全く違う経緯をたどりました。15 年前、私は「ようやくゴール、つまり、神にたどり着いた。これからは何もかも良くなるだろう」と思っていました。ところが、ババとの最初の年はまさに正反対のことが起こりました。私は何度も失業し、蓄えは徐々に減っていきました。また、私が待ちこがれた「恋人」は、最初の訪問の際にババが約束してくださったにも関わらず、私の人生に現れたのは 4 年後のことでした。

アシュラムのババの元にいる時は、自分は幸福だと感じることが度々ありましたが、ドイツではそうではありませんでした。「問題」、もっと分かりやすく言えば、課題が次から次へと私に降りかかりました。また、私を取り巻く状況は公私ともに私のババへと至る道を支えてくれることはありませんでした。神との一体化への道において大切なのは、善良で幸福な人間であることだけでなく、多くの前世から生じたカルマの解消も大切であることを理解したのは、数年経ってからのことでした。その結果として、今、私は過去に体験した多くの「困難な時期」について打ち明けることができるのです。

最初の年は、私はいつもババのところに願い事リストを持参し、多くの願い事が叶えられなかったり、ババが願い事に全く応えてくださらなかった時には、ひどくがっかりしました。その一方で、ババは私の人生についてご自分の計画をお持ちで、そのご計画が私の計画とは異なっていることもよくあるということ、そして、その場合、ババは私の計画を援助してくださらないということに、私は次第に気がつき始めました。

数年前のことですが、長年の女性帰依者に「ババへと至る道の最初のころは、とても困難な時期を体験しました」と語ったことがあります。彼女は「ババの元を去ることなくその困難な時期を乗り越えたことは幸運なことですよ」と言いました。当時、自分の願い事を叶えてもらうために、また、癒してもらうためにババの元にやって来た人々の多くは、ババが自分の願い事を叶えてはくれず、その代わりに、厳しい試練を課したので、ババの元を去っていきました。

厳しい試練の時期に私を支えてくれたのは、私の神、ババへの大いなる愛であり、神の家にたどり着いたという感情であり、そして、他の帰依者たちの支援でした。

●2003 年●

そのうちに、ババから発せられるあらゆる事象を楽に受け入れられるようになりました。最初のうちは、私にとって都合の悪い多くのことと闘っていました。その結果、私の怒りや苛立ちはますます募り、無意味な闘いをすることもよくありました。ババはこの「ドラマ」を傍観されていらっしゃいましたが、私にプレッシャーをかけられることなく、ただ私だけがあれやこれやと忙しい思いをしなければなりませんでした。最初のころ、「ナーマ・マーラ（300 の御名）を唱えるのは苦痛です」とババに言ったことがありました。すると、ババは「毎日ババのことを考えるように。それでも十分だろう」と仰りました。その結果、私は時間をかけてナーマ・マーラを習慣づけることができました。私が一時期修道士として過したカトリック教会では、宗教上の強制的かつ義務的な儀式を多く体験させられました。この強制的な宗教性を私はババの元で再び体験したくはありませんでした。私の望みは心からババに帰依することであり、時刻表どおりの儀式を介して帰依することではありませんでした。
今では自分がナーマ・マーラを唱えたり、他の帰依者たちとプージャを執り行えることをとても嬉しく思います。なぜなら、ナーマ・マーラやプージャにババの存在と祝福を感じることができるからです。では、まずは2003 年から話を始めたいと思います。

私は若いころからずっと神を探し続けていました。ミサの従者として神に仕えることは私にとって大切なことでした。イエス・キリスト、12使徒、アッシジの聖フランチェスコが私の手本でした。そのため、私は 17 歳の時に修道会に入会し、伝道士として人々を神へと導こうと決意しました。19 歳になると私は両親の家を出て、友人たち全員と別れ、ドイツ・アイフェルにあるスタイル修道会[1]の伝道館で 1 年間を過しました。そこには私を含む 12 人の修練士[2]と修練長がいて、まるで使徒の集団の中にいるような感じでした。多くの祈り、瞑想、そして、神への信頼に満ちたとてもスピリチュアルな時期でした。しかし、この時期が過ぎると、私は再び友人、恋人、普通の職業生活という通常の生活にとても憧れるようになりました。

その結果、私は修道会を去りましたが、その後長い間、自分がどこに向えば良いのか分からずにいました。私が自分の神との体験について語っても、友人たちは私の言っていることを理解してはくれませんでした。

このようにして、神、そして、志を同じくする人々への憧れが私の中で次第に大きくなっていきました。

このような状況が 40 歳になるまで続き、ようやくスリー・バーラサイ・ババのことを耳にしたのは 2002 年のノイファーンでのことでした。当時、ウルリケは「ババは神の化身であり、すべてをご存知です」と説明してくれました。私にしてみれば、ババが本当に神なら、すべてを知り、奇跡も起こせるということは自明のことでした。私が驚いたのは、ババがドイツからとても遠く離れたインドに住んでいるということだけでした。敬虔なカトリック教徒である私はイエス、神なる父、精霊を信仰し、イエスはイスラエルか、おそらくドイツで「復活」すると思っていたからです。その後、2002 年に私は数回ボルフガング・ボックの主催するプージャに参加しましたが、ここではサンスクリット語が飛び交い、私の目にはとても奇異に映りました。「ナーマ」とバジャンの「ジャイ・アンベイ・ジャドアンベイ」だけは、インドを旅行したことがあったので、知っていました。

訳注１：神言会（しんげんかい）のこと。キリスト教徒でない人々への伝道を目的として、1875 年、A. ヤンセンがオランダのスタイルに創立したカトリック修道会。（出典：ブリタニカ国際大百科事典）
訳注２：見習い期間にある修道士。

2002 年秋のことです。当時、ババのアシュラムに滞在していた女性帰依者が私に電話をかけてきて、「何があってもここに来るべきよ」と言いました。ババがそれほどまでに楽しく魅力的な人物なら、一度は体験すべきなのでしょう。このようにして、長期休暇の取れそうな時期を確認し、2003 年 1 月のハイデラバード行きの飛行機を予約しました。

私がクルヌールのアシュラムに到着した日の夕べに、ババは寺院でのバジャンの朗詠にお姿を見せられましたが、その時は真剣な表情をしていらっしゃいました。それは、私がそれまでに聞いていたババについての手掛かりとは違っていました。その後、ババは神に対する私のイメージをひどく混乱させ始めました。夕べになると、帰依者たちはババのお出でを待っていましたが、私は旅行でとても疲れていたので横になって眠っていました。翌朝、私が庭に座っていると、庭から出て行くようにと言われました。そうしないと、ババは外出されないからと言うのです。そのため、レギネ・ボルケの著書『比類ない愛』を読もうと、自分の部屋に戻りました。その直後、私の部屋のドアを叩く音が聞こえ、女性永住者が「マーティン、もう一度、庭に来てください。あなたを庭から連れて来るようにとババに言われました」と言いました。私が彼女と一緒に寺院に行くと、そこではババが別の男性永住者と座っていらっしゃいました。私はとても興奮しました。ババの隣に座ることが許され、ババはそのお顔を輝かせて私をご覧になり、私の名を呼ばれて挨拶をされました。

●2003 年●

ババは私の様子を尋ねられ、その御手を私の肩に置かれました。ババが本当に神なら、私が神を探し求めていることや、これまで「キリスト教徒としての人生」を歩もうとしていたことをご存知であるはずだと思いました。そして、事実、ご存知であると私は感じました。ババはとても魅力的な人物で、私の心を開いてくださいました。間もなく私は、ババは私のことを体験的にもご存知でいらっしゃると感じるようになりました。当時の私は神学者かつラジオ編集者としてカトリック教会で働いていました。私はババに「私は今、どうすべきでしょうか？」と尋ねました。また、私は次のようにも尋ねました。「私はイエス、神なる父、精霊を信仰しています。私はババをどのように扱うべきでしょうか？」。ババは「私をそれらに加えるだけでいい」とお答えになりました。おかげで私は楽に生きることができました。というのは、40 年もの間イエスに祈りを捧げてきたので、最初のころはババに祈りを捧げることが私には苦痛だったのです。

その後、ババは私をカロム・ゲーム（ビリヤードの一種）に招待してくださいました。私は男性帰依者とペアになってババと対戦しましたが、当然のごとくいつも私たちが負けました。ババは「勝つこともあれば、負けることもある。大切なのは自分が楽しむことだ。人生とはそんなものだ」と仰っただけでした。これは私にとって重要なメッセージでした。ちょうど私は職場でいじめにあっていて、キリスト教会のラジオ編集者としてどれだけ長く働けるかも分からなかったからです。

1 時間後、ようやく他の帰依者たちが私たちのところにやって来ました。このババとの最初の出会いが全く特別なものであったと分かったのは、それから数年も経ってのことでした。私は 3 日後にゴアに向うつもりでいましたが、「今、神の元にいるのですから、他の場所に行く必要はないでしょう」とある人に言われました。この一言で私は不安になり、予定より数日長く滞在しました。その後、ババに「ゴアの海岸に行っても良いでしょうか？」と尋ねると、ババは「もちろん」とお答えになりました。

もし、その時アシュラムに滞在し続け「なければならなかった」なら、すぐにアシュラムに戻ることはなかったと思います。これは最善の選択でした。私は3週間アシュラムを離れ、その間にババに対する印象を整理し、著書『比類ない愛』を読み終えることができました。さらに、私はババのドキュメンタリー映画の制作をババに約束していたので、その構想にも取りかかりました。
3 週間後の帰国前日に、私はもう一度ハイデラバードのアシュラムにババを訪ねました。もう一度ババと個人的に面会し、インタビューをしたいと思っていました。加えて、ドキュメンタリー映画には多くのババの映像が必要でした。ところが、ババはご不在でした。そこで私はレギネにババについて質問しても良いかと尋ねると、彼女は「いいわよ」と言ってくれました。このようにして、ババについての素晴らしいインタビューが生まれ、映画『スリー・バーラサイ・ババ — インドの神の化身』に収録されました。